

マンハッタンの憂鬱

Kenji 横田健次 Yokota



マンハッタンの憂鬱

横田健次

Kenji Yokota

近代文藝社

マンハッタン^{ゆううつ}の憂鬱

1995年11月10日 第1刷

著 者 横田 健次 (よこた けんじ)

発行者 福澤 英敏

発行所 蠶近代文藝社

〒112 東京都文京区目白台2-13-2
(03)3942-0869 Fax(03)3943-1232

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

製 本 小泉製本所

©Kenji Yokota 1995 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-7733-4675-2 C0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

はじめに

もう二十数年前になるか——一九七二年三月、「世界の都市Ⅱニューヨーク」で日本人殺害事件が起こった。それは、日本のある広告会社の社員で、東京本社から海外研修生として選ばれ、ニューヨークをはじめ世界の都市を巡り、研修テーマである「日本の国際PR」を究めていた研究熱心で、もの静かな壮年の男であった。

ニューヨークは当時「世界の犯罪都市」とまでいわれ、麻薬、ポルノ、売春、万引き、強盗、殺人など数知れず、市当局はこうした事態を憂慮しながらも、財政難から改善への対策にはほとんど手を打っていなかった。

蔵原醇^{くら はらあつし}の殺人事件はニューヨークで起こった初めての日本人殺害事件であった。私は、この事件の約一年近く前から同じ会社のニューヨーク支局駐在員を命ぜられ、ニューヨーク生活をしていたが、事件はその日私と彼とが別れてわずか二時間後に起きただけに、私にはショックであった。

ニューヨークがこうした犯罪を一掃し、経済、文化、芸術の都として人々があこがれる「世界の平和都市」に再興することを願つて私は一大キャンペーンを企画した。日本で悲報に接した蔵原夫人から当時のニューヨーク市長リンゼー氏に訴えの手紙が送られ、市長からも丁寧な返事が日本に届けられた。朝日新聞がこのことを写真入りで大きい記事として掲載した。

ニューヨーク市はようやく本格的に市の浄化に本腰をあげた。その結果一年後、数字の上では確かに犯罪は減った。

私は、この一連の過程をすべて裏方としてとりしきった。しかしこのことは、私の勤務する会社にとっては「好ましくない」ことであつた。……「真の人間か、会社人間か」……サラリーマンの生き方とは実に難しいものだと思感する。

本稿は、この事件の概要を語り、その後私自身の試みたキャンペーンの記録を描いた。

さてあらかじめお断りしておかねばならないことは、本稿ではニューヨークにおける事件発生の前後は私自身がごく客観的に描いた真実の記録であるが、その後の日本における葬儀および蔵原夫人の生活、ニューヨークでの行動などについては、日米間の手紙の交換によつてのことである。

本来なら、この形式でなく、手紙をもとにしてその過程を書き直した方が読みやすいかもし

れないが、私としては蔵原夫人および会社関係者の当時の手紙の文面にこそ、その人の真摯な熱情がこもっており、これは永く保存されるべきと考え、あえてそのままに記述した。したがってその中の一字一句の訂正もないから読みにくい、分かりにくい箇所があるかもしれない。当時、幸か不幸か蔵原醇の身近にいた私にとって、事件の発生およびその後を語るのは心底からつらい。しかしこの事件はアメリカの犯罪不感症ともいえるべき体質を少しでも改善したいと願った、過去の私自身の経歴でもある。

二十数年経った現在のアメリカの体質は改善するどころか益々悪化の一途という感がするが、犯罪撲滅への情熱は今だに私の内にみなぎっている。

マンハッタンの憂鬱・目次

“He might die……”	9
その日	15
黒い影	27
その後	33
何か訴える機関は……？	53
リンゼー市長様	59
翻訳、そしてタイプ	64
一日四千通！	77
市長から日本の未亡人へ	83
日本では……	89
先輩に感謝	106
蔵原夫人ニューヨーク滞在記	
知床の岬に……	138

マンハッタンの憂鬱

“He might die……”

電話のベルが間隔をおいて、ゆつくりと鳴った。……三月に入つたとはいえ、冬のきびしく、長いニューヨークに小雪が舞い、底冷えのする週末の金曜日、私はある会合に出席し、ちらちら降る小雪の中を“酔いざまし”に歩いて、半時間ほど前に帰宅し、週末の気楽さから、これから遅い夜食でも、と思つていた。

時計は二本の針がちょうど12の数字に重なるうとしていた。……私は“新村だろう”と咄嗟に思った。新村は当時ワシントン郊外のメリーランド州に住んでいた会社の海外研修生の一人であつたが、アメリカで電話料金の安くなる夜の十一時すぎに、ニューヨーク支局の駐在員である私の自宅へ電話してくることがしばしばあつたからである。

……電話に出た妻が、ちよつと緊張した面持ちで「領事館からです」という。

リビングルームの一角においてある電話台までの数歩の間、〃領事館から？ この夜中なの
に？〃と、私は口の中でつぶやきながら、何のことだろうかと考えたが、すぐに思い当たる何
事も得られなかった。

電話の相手は低く、押し殺したような声で、

「私は日本領事館の田中ですが、電通にクラハラさんという人がいますか？」

「ハイ研修生ですが……」

日本領事館の田中氏とは、日本へ仕事で行くアメリカ人のビザのことをはじめ、色々なこと
で何回かお会いして、顔なじみになっており、住まいも近くであつたのでよく知っていた。

「そのクラハラさんが刺されたらしいんです……」

「エッ！ なんですって？」

私は意味が分からず聞き返した。

「クラハラさんが刺されて重体らしいのですが、私はいまバスに入っていましたし、詳しいこ
とは分かりませんので、マンハッタンの〃古都〃という日本レストランに電話して、そこに
いる東京書店の加藤さんという人に詳しい話を聞いてみて下さい。電話番号は……」

と伝え電話は切れた。

田中氏の声は〃さも迷惑〃といった調子で私には意外に思われた。

私は受話器を置くのも忘れ、いま田中氏の言った言葉を反すうしてみた。

「刺された？ そんなばかな！」——彼はわずか四時間前に、私と別れたばかりではないか。……間違い、何かの間違いにちがいない。……しかし、もし本当とすれば、どこを刺されたのか。足？……腕？……。『刺されて全治○週間とか、○か月とか』よく新聞記事に出ているあれか……。それより、どうして、なぜ刺されたのか……。

私は、半信半疑、教えられた電話番号を回した。回す手が寒さと緊張で小さきみにふるえているのを意識した。

電話のベルが何回も鳴っているが、相手は出ない。『おかしいなあ、番号をまちがえたかな』『おちつけ、おちつけ』と、はやる自分を抑えながら、番号を確認してもう一度ゆつくりと回した。

……電話口から勢い込んだ、かん高い声が耳をついた。

「横田さん、すぐ行動して下さい。……クラハラさんがやられちゃったんですよ。……ちよつと、ちよつと待つて下さい」

電話が代わった。電話の声も英語に変わった。

“Do you know Mr. KURAHARA?” (クラハラを知っているか) ニューヨーク警察の刑事である。

「クラハラは今日どこにいたのか？ 彼と別れた時間は？ 場所は？……」

そして年齢、家族のことなどその刑事はやつぎばやに蔵原のことを私に質問してきた。

私はそれらの質問に、あまりうまくない英語でも丁寧に答えながら、「あー、やはり本当なのか。それでは、蔵原は、いまどこに、どうしているのか？ 刺されたあとは？……」思い切って聞いた。刑事が答えた。

“He might die (彼は死ぬかもしれない) ……”

そのひと言は、冷たい響きをもって、私のからだ中をかけめぐり、ついには心臓に突き刺さるような鋭いひと言であつた。

時計は午前〇時二十分をさしていた。私はすぐに林支局長の自宅に電話して、事情を手みじかに説明した後、車を出した。

雪はいつしかやみ、雲の間からわずかに顔を出した月が路面を白く照らし出していた。マンハッタンのハドソン河に沿ったウェストサイドハイウェイを私は精いっぱいアクセルをふかしながら、刺されるとはどういうことなのか。いや、あいつは殺したって死ぬような男じゃない。どうか生きていて欲しい。大丈夫、大丈夫”と、とりとめのないことを自分に言い聞かせた。

約二十分後、車は刑事から教えられたマンハッタン一一四丁目のセント・ルカ病院についた。

……何事もないような静けさ。正面玄関はすでにしまっているので非常口へ廻る。入り口の門扉の上に黒人の子供が数人たむろしていた。彼らに声をかけてみた。

「日本人がこの病院に来たか？」

「日本人かどうか知らないが、二、三時間前に、ここへ運び込まれた男はダメだった……張りつめていた身体中の力が一瞬にして、音をたてて崩れ落ちていくのを私は感じた。心は、はやった。

病院の受付へ走った。受付では白衣を着た黒人の女がひとりで居た。彼女があちこちに電話して担当の医師を探してくれたが、どこへ電話しても、この時間では分からないようだった。私はイライラしてくる自分を感じた。

時計は午前一時を回り、こんな時間でもけがや病気の患者が非常口から運び込まれており、病院という所には全くといってよい程に縁のない私は、その不気味さで不安がつものる一方であつた。……ようやく、医師の居場所が分かったらしい。しかし、その医師の来る時間の経過がいかに長かつた。

細ぶちの眼鏡をかけた白衣の男が現れた。しかし、その白衣の左下半身の部分が大きく真っ赤に染められていた。……ああ、やはり……その人は、私を見るなり、低いがよくひびく声で、「私はドクター・サリバン。ミスタークラハラは午後十時十五分頃ここへ運び込まれた。心臓、

胃の二か所（これはその後の検視で心臓だけに訂正された）をナイフ状の凶器で刺されており、すでに意識はなかった。絶望的な状態であつたが、ただちに心臓を切り開き、心臓マッサージをはじめ、病院として考えられるあらゆる手をつくした。しかし……彼の意識はとうとう戻らなかつた。死亡確定時刻は十一時三十分。……以上だが、大変お気の毒である……」と、一氣に言つて、その大きな目を伏せた。